

中学生の時、遠藤周作のエッセイ集と出会い、純文学の作家というものに憧れを持つようになった。

もつとも、今考えてみれば、僕は小学生の頃から本には親しみを感じていた。子供向けの偉人伝人物話から始まり、中学生になると早川文庫のSFに夢中になっていた。高校生ともなると、受験勉強はそっちのけで、武者小路実篤、井上靖をはじめとする純文学の虜になった。それだけが原因ではないが、お陰で二年、浪人をした。

東京から念願の北海道大学に進学しても、純文学に対する情熱は衰えることはなかった。

札幌では最初、藻岩山もいわやまのふもとに建つ学生寮に入寮した。当時父が勤務していた日本電信電話公社（現NTT）の子弟寮である。

そこで一年半が経過した頃、今度は、市内を流れる一級河川・豊平川の大きな堤防のすぐ下にある、二階建ての木賃アパートに引っ

越しをした。新築ではあったが、場所が場所である。昔の話だが、ここは札幌では一番の細民地区であったという。僕が暮らした当時も、決して治安がいいとはいえない所であった。

深夜、不良に絡まれることもしばしばであった。暗い夜道を歩いてコンビニに向かっていると、横からいきなり真空飛び膝蹴りをしてくる高校生がいた。

「俺ともめないかいッ！」

もめる、とは北海道弁で「喧嘩しないか」という意味である。雪深い路地は、プロレス技をかけるには打ってつけの場所であった。

大学生になった僕は、酒場通いの面白さを知るようになった。酒場といっても、スキノの一流店などとは程遠い場末のジンギスカン屋である。

場所は、最初に住んだ学生寮の近くの、住宅街の路地の一画である。そこに小さな飲屋

が二十数軒集まっていた。かつての夕張炭鉱の飲み屋街を思わせる風情であった。切り盛りするおばちゃんは七十歳を過ぎていて、創価学会の会員だった。僕も、池田大作の『人間革命』という著書をもらった。創価学会の創始者である牧口常三郎の母校が目と鼻の先にあった。石狩に移転する以前の北海道教育大学札幌分校である。

飲み屋街が賑わうのは毎晩十一時を回るあたりからである。そんな場末であったから、少なからず流血騒ぎも起こった。

現に、僕の隣りで飲んでいたおじさんが、何かのきっかけで、そのまた隣のおじさんに、ビール瓶で頭を割られるという事件にも遭遇した。若い頃、東京逓信病院（千代田区飯田橋）で看護師だったというおばちゃんが、大活躍だった。駆けつけた救急隊員にも褒められた。

ある時、地味なコートを着た渋い紳士が僕

の隣りに座った。カウンター席である。カウンターのといっても、ラーメンを置くと汁の表面が左に偏った。カウンターだけではなく、ジンギスカン屋そのものが傾いていたのである。

おばさんから耳打ちされた。隣の紳士は、ヤクザであるという。だが、恐いもの知らずだった僕は、その紳士に、様々な質問を無遠慮に投げかけた。

後日、その飲み屋街の路地で、紳士とふたび顔を合わせた。

「この前はおばさんの手前、黙ってたけど」

「アツ、はい」

「あんまりなめたことしてくれるなよなッ！」

「……」

気がついてみると、僕は雪の中に倒れていた。その晩は飲み過ぎて大分酔っぱらっていた。どうも、ボコボコに殴られたらしい。傍らには僕が愛用のサイクリング車が倒れていて、チェーンも外れていた。直そうと手を触

れたが、簡単な作業のはずが、サツパリ要領がつかめない。頭を強く殴られたせいではないかと思った。

思い返せば、この類の話はまだほかにもある。当時の僕は、これらすべてを、作家修行の一環だと思っていた。小役人の小倅こせがれで成績のことばかり気にしながら生きてきたから、学生のうちに少しでも異文化に触れておかなければならないなどと、妙な使命感に燃えていたのである。

そんな僕も還暦を過ぎた。会社員人生は途中で切り上げ、作家修行を本格的に始めて早七、八年が経過する。世の中は僕の学生時代とは大きな変化を遂げ、あんな経験が役に立つとはとても思えない様相を呈している。

僕の作家修行は、結果的に、ただの蹴られ損、殴られ損であった。

なんとも愚かな結末である。